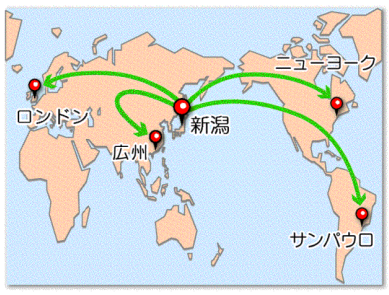
(C)新潟日報社

グローバル にいがた

国際交流拠点から

新潟日報社が開設した米ニューヨーク(NY)、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州(パリ)の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をリポートしてもらい、毎月第1月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。



次回は1月8日付で掲載する予定です。

from NY

ダン　里花さん
＝新潟市西蒲区出身＝

多様さ 母校に重なる

ニューヨークといっても、私が住む駅はマンハッタン中心部のグランドセントラル駅から電車で45分ほど北上した、野生のシカが出没するような田舎である。この秋子育てが一段落したのを機に、夫の新規開業の仕事を手伝うことになり、電車通勤が始まった。

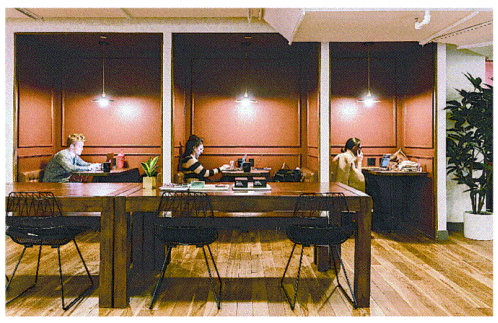
マンハッタンの職場は、とてもユニークだ。シェアオフィスといって、各会社のオフィスはそれぞれ別だが、その他の仕事に必要な受付、会議室、通信機器、カフェテリアなどを共有する仕組みになっている。効率的で設備コストを抑えられ、異業種のネットワークができやすいことから、中小企業のみならずアントレプレナーの間で人気の高い形態だ。

アントレプレナーとは起業家・創業家を意味する。このフロアだけでもIT、金融、法律、サービス、メディアなどの多様な業種に加え、人種、国籍も実にさまざまな老若男女のアントレプレナーがいるのには驚く。日々交わす何げない会話から新しいアイデアや取引が生まれることも珍しくない。

何かが懐かしい。ここに通うようになってからずっとそう思っていたら、はたと気づいた。高校時代だ。実家の駅から白山駅まで越後線で同じ45分。当時白山駅近くにあった新潟明訓高校での3年間は生き方の原点となった楽しい時間だった。とても自由な校風で個性的な生徒や教師がたくさんいた。ある時、文化祭で短い映画を撮ることになり、今のように手軽な撮影編集機器がないので、それぞれの知恵や特技を駆使してなんとか仕上げた。その時の、異なる人や物が組み合わさり何かが完成する楽しさが忘れられない。今の職場にも、あの時代と共通する空気が流れている。

この夏、29年ぶりに高校の同窓会に出席した。再会した同窓生たちは文字通りアントレプレナーぞろいだった。あの時あの場所で過ごせたことと、この年齢でこの機会に恵まれたことに感謝している。そして、新潟という共通項を持つ人たちと、故郷に貢献できることを何かやってみたいという夢が芽生えた。

(ダン里花さんは1971年生まれ。法律事務所で事務の仕事をしています)



人気の高いシェアオフィス＝Work提供

from 広州

松苗　明さん
＝上越市出身＝

食やマラソン楽しむ

大家好(皆さん、こんにちは)。早いもので広州での駐在生活も3年がたちました。

27年前の学生時代に一度だけ北京を訪れたことがあります。天安門や万里の長城などを観光した際のイメージがとても強かったのですが、まさか再び中国を訪れる機会があるなんて思ってもいませんでした。

正直なところ、上司から中国行きの話があった時には一瞬の迷いがありました。でも、世界最大の自動車市場で仕事ができるチャンスと受け止め、家族の理解と後押しもあり、ここ広州での駐在生活をスタートさせたのです。

まず驚いたのは、高級ブランド車を中心とした車の多さと交通渋滞、マナーの悪さでした。車幅感覚に優れている?のか、同乗している身としては居眠りもできないほど強引な車線変更による割り込み、鳴り響くクラクション、今は無くなりましたが逆走する車などなど…。通勤の車中ではハラハラ、ドキドキする日々が続いていましたが、今ではすっかり慣れてしまった自分がいます。

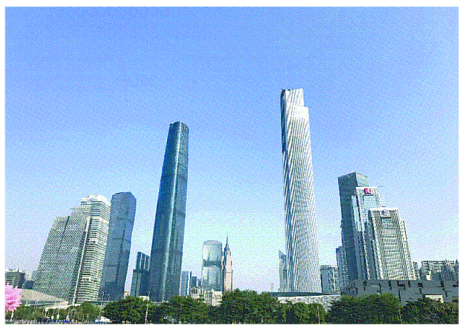
趣味のマラソンでは、週末に走友会のメンバーとともに近くの白雲山や珠江で練習したり、近郊の香港やマカオのマラソン大会に参加したりしています。心地よい汗を流せることが何よりのストレス発散となり、身心ともにリセットできます。

広州は年間平均気温が20度を超す温暖な気候なので、一年中Tシャツ、短パンでのジョギングが可能です。洗濯物も少なくて済み、単身者にはありがたい環境です。

また、最近は週末の楽しみとして、流行のシェアサイクルに乗り、地場料理店巡りをしています。「食は広州に在り」という言葉通り素材の味を大切にしている店が多く、安くておいしく安心して食べられるお店もたくさんあります。

まだまだ悪戦苦闘の日々ですが、ここ広州でたくさんの方々に支えていただきながら、何とかやれていることに感謝しています。そして、いつも応援してくれる家族に、心から「ありがとう」と言いたいと思っています。

(松苗さんは1971年生まれ。自動車部品製造会社の購買・生産管理部門部長です)



高層ビルが立ち並ぶ広州の市街

from サンパウロ

佐々木　暁子さん
＝新潟市秋葉区出身＝

自転車専用道が登場

ここ数年、サンパウロ市ではちょっとした自転車ブームが起こっています。

サンパウロの街はもともと坂が多く、自転車に乗る人はほとんどいませんでしたが、健康のためなどの理由で乗る人が増えています。深刻な問題となっているマイカー通勤の渋滞を改善したい行政もブームを後押ししました。

市は民間企業と協力して無料の自転車貸出場を設け、自由に自転車で移動できるようにしました。これは公共交通機関のパスがあれば誰でも利用できます。今では協力企業のロゴマークをつけた無料自転車が行き交うのが日常の光景となっています。

これまでは自転車専用車線がなく、走るのが危険でしたが、市は専用車線を設置。市内のあちこちに赤いペンキで塗られた専用車線が現れました。

ただ、専用車線は「細切れ」で、車線がない部分もあります。しかし、これまで肩身の狭い思いをしていた自転車利用者も、車を気にせずに堂々と利用できるようになりました。

市内各地にある専用車線の中で特に市民に人気があるのが、市の中心部にある目抜き通り「パウリスタ大通り」のど真ん中に造られたものです。こちらは歩道を改修し造られました。数キロにわたる大通りの端から端までを自由に往復できるもので、週末には大勢の人が走っています。

数年前からパウリスタ大通りが日曜日に限り歩行者天国として開放されていることもあって、自転車利用者の増加にも拍車をかけているようです。

自転車を利用する人の増加に伴って、車やバスなどとの接触事故や自転車の盗難が増えるなど課題もあります。

ただ、健康のため、そして深刻な渋滞を解消するためにも、今の自転車ブームが一過性のものではなく、市民の間に定着してくれればといいなと思っています。

(佐々木さんは1971年生まれ。在名古屋ブラジル総領事館勤務などを経て、現在はサンパウロで日本語を教えています)

サンパウロの自転車専用車線。車を気にせず、走れるようになった

from ロンドン

川村　今日子(いまひこ)さん
＝英国新潟県人会会員＝

飾る場所にこだわる

ロンドンは多民族の都市です。借りているスタジオでも、イングランド、アイルランド、スコットランド、ウェールズを総称したブリティッシュが大半ですが、南アフリカ、イラク、ポーランド、インド、ルーマニア、ナイジェリアなどさまざまな国のアーティストが在籍しています。

現在私は、英国ではクラフトフェア、オープンハウス、オープンスタジオなど陶芸作品を展示する機会は多く、多い時で年に6回くらい、日本では2、3年に1回ほどのペースで展覧会を行っています。

展覧会の際のお客さまの反応は良く、幸い購買にもつながっています。日本で2015年に新潟三越(新潟市中央区)で個展を開いた時、ご高覧されたお客さまから予期しないほど購入していただきました。ただ普段は「すてきな作品だけど、もう収納する場所がないから買えない」と残念なお声を聞くことも結構あります。

英国の展覧会では、お客さまは自分がいいと思ったら必ず買います。

今年の春に開いたホーランドパークの展覧会でのこと。スウェーデン人のご夫婦は、気に入った大きい作品を家のどこに置くかで議論になり、その日は奥さまの「やっぱり置く場所ないわね」の一言で小さめの食器のみになりました。

ところが次の日の朝、ご主人が走って画廊にやって来ました。画廊に向かうべく地下鉄に乗っていた私に電話連絡が取れず、「売れたらどうしよう」と居ても立ってもいられなくなったというのです。「折り合いはついたのですか」と尋ねると「僕が気に入ったからいいのだ」と。

あるスペイン人の女性は、どの部屋のインテリアに合うか吟味して3日間画廊に通いました。

またインド人ご夫婦の場合は、後日作品をお届けに行くと、ご主人が「今作品を置くためのテーブルを探しています」と。置く場所や調度品にも気を配って作品を飾る、そのこだわりは作り手側も勉強になります。

ほかにもご自宅に作品をお届けに行くことがあります。自分の作品をどんなインテリアの部屋にどのように飾るかを見る機会があるのはとても楽しく、いろいろな国の文化にも触れることができ、作家冥利(みょうり)に尽きます。

(川村さんは2003年に渡英、陶芸作家として活動しながら和食器制作のワークショップを開催しています)

写真家とのコラボレーション展覧会の風景